

著者
聞く小熊
おぐま
英二
えいじ
慶應義塾大学総合政策学部助教授

『インド日記』 牛とコンピュータの国から

新曜社

2700円

ITで注目されるインド
変動期の中の「格差」

——今年の一、二月、国際交流基金の専門家派遣事業でインドのデリー大学に日本近代史の客員教授として招かれました。その二ヶ月間の滞在日記ですね。IT（情報技術）で注目されるインドですが、実際の印象は。

■インドはとにかくでかくて広い。シリコンバレーでインド人技術者二〇万人が働いているといつても、人口一〇億人のうちのわずかなものです。階層格差が大きく、上層の〇・〇何パーเซントかの話。ロウワー（下の階層）にしてみれば、別世界です。

——自分の国が他国で話題になっていることを知らない人が結構多い。

■識字率も低いし、ロウワーは高級紙を読んでいませんから。

そもそも、同じインド人という意識が必ずしもない。インドでは統一国家

できているのでしょうか。

——「知識人」という、今の日本では死語のような階層が、知識も教養も財産も責任感もある社会の重要な要素として紹介されている。大多数の一般大衆の期待に応えるような働きをしているのでしょうか。

■彼らの議論が、一般大衆に届いていふとは思えませんが、やはり階層差が大きいから、国家や地域の中核になっている上層の人びとを動かせられ、それだけでもかなり効果があるでしょう。これは高度成長期以前の日本も同様だった。丸山真男は著作を大衆に読ませようとは思わなかつたでしょうが、それで十分だった。逆に、今日本で「知識人」が成り立たない理由がよくわかりました。

——それにしても、タフな旅行記です。大学の講義と各地の研究者との交流旅行、その合間に、博物館や学校の見学。ちょっとと道を歩く時にも、「変動期の人間のアイデンティティーの形成」といった日々の研究テーマが顔をのぞかせる。旅として見ると、その中身の詰まり具合は驚異です。

■日記を書く、ということをしたので、インドでの外界や人間との交流も活発化しました。書かなきゃ、あそこまではやりません。でも、ほぼ毎日、原稿用紙一〇〇～二〇枚書くのは大変でした。三～四時間かかりますから。自分でもよくもったと思う。もう一度やつたら、どうかなっちゃうんじゃないかな。

（聞き手・伊藤 和史／毎日新聞記者）

